（メッセ海外通信VOL.37 2016年4→6月号掲載記事）

～お年玉も電子化！？　中国電子商取引の現状～

下関市総合政策部国際課
（青島市派遣職員）
和木田　真功

今や生活の一部となったネットショッピングやオンライン決済システム。中国でもその発展は著しく、日本にはないサービスなども存在します。今回はそんな「電子商取引」の現状についてご紹介します。

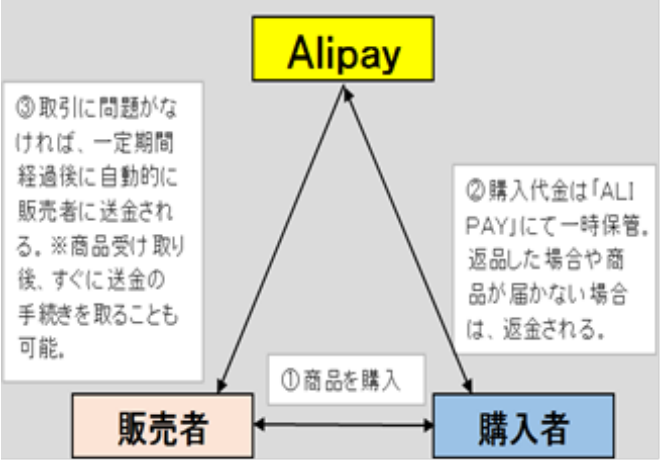
早速ですが、「淘宝（タオバオ）」というサイトをご存知でしょうか？淘宝はアリババ集団が運営する、中国のネットショッピング界で最も有名なサイトです。昨年の１１月１２日の日本経済新聞の記事では、「独身の日」（中国では１１月１１日に１が並ぶことから「独身の日」として、毎年ネット上で大セールが行われます。）にたった１日で約１兆８００億円の売り上げを記録したと報じられ、日本でも大きな話題となりました。商品の量、質、価格、取引の安全性には定評があり、筆者も普段この淘宝を利用しています。

まず淘宝で買い物をするにあたり、同社が運営する「Ａｌｉｐａｙ（アリペイ）、中国語では『支付宝』（ジーフーバオ）」という電子マネーの登録を済ませる必要があります。実はこのＡｌｉｐａｙを利用することにより、取引の安全性が担保されることになります。目当ての商品を購入し、決済すると、額面上の残高は減るのですが、実はこのお金は一旦Ａｌｉｐａｙ側にプールされており、仮に商品が届かない場合や、商品に瑕疵があり返品した場合は、このプールされているお金が購入者の手元に返金されることになっています。これにより購入者と販売者間のトラブルを未然に防ぐことができるというわけです。商品が届き、特に問題がない場合、一定期間経過後に販売者にお金が送金され取引終了となります。（一定期間を待たずに自身で送金の処理を行うことも可能です。）

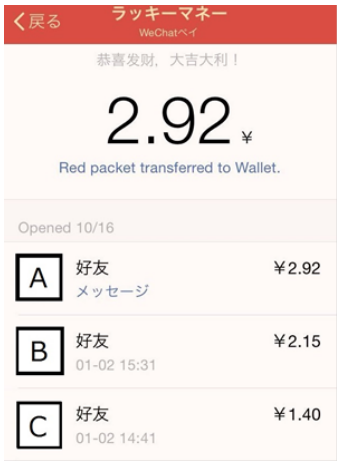
さてこの便利なＡｌｉｐａｙですが、実はコンビニや飲食店、タクシーなど様々な場面で利用可能です。利用方法はとても簡単で、スマートフォンでバーコードを表示し、それを店員が読み取り、支払いが終了します。また中国で５億人以上が利用している「ＷｅＣｈａｔ（日本でいうＬＩＮＥ）」も電子マネー「ＷｅＣｈａｔ Ｐａｙｍｅｎｔ、中国語では『微信支付』（ウェイシンジーフー）」を取り扱っています。

中国では新年を迎えた際、年長者は「红包（ホンバオ）」と言われる赤い包にお金を入れて、子供に渡します。日本でいう「お年玉」です。実はこのお年玉もオンラインでやり取りすることができます。例えばＷｅＣｈａｔ上ではグループチャット上でお年玉を送ることができるのですが、金額は開いてみるまでわかりません。また送信者は金額をランダムに変える設定も可能で、開封後は「誰がいくら獲得したか」など確認することができ、くじ引きのような一面もあることから人気を博しています。ちなみにＷｅＣｈａｔでは大晦日一日で４．２億人が８０．８億件のお年玉を送受信したと発表がありました。

現在、日本を訪れた中国人観光客の多くは「銀聯カード」を使用し決済をします。しかし最近では、日本国内のセブンイレブンやローソンの一部店舗でＡｌｉｐａｙでの支払いが可能になりました。今後は中国人旅行客を呼び込むため、スマートフォン利用の電子マネーに対応した決済システムの整備が求められることが予測されます。



【淘宝独自の決済システムイメージ】



【ＷｅＣｈａｔ上の「お年玉」確認画面】